

ラストコール

蒼井上鷹



「この間、車坂義男さんと話したよ」話が途切れたところで、先輩がぼつりと言った。

クルマザカ？ どこかで聞いたことのある名前だ。確か最近ニュースで――。

「思い出しました。息子をいじめていたクラスメイトを殴って、逮捕された人ですね」つい声が高くなる。「彼が、この留置場に？」

「十日ほど前に入ってきた」先輩はうなずいた。「だいぶ憔悴しているようだったな。息子を亡くしたばかりだから無理もないが」

事件のあらましはこうだ。車坂の息子である正夫は、通っていた中学校で一年近くいじめの標的にされ、「もう全部いやになった」と日記に書き残して失踪した。その時まで、一人息子がいじめられていたとは知らなかった車坂夫妻は、慌てて正夫の友人たちに訊き回った末、息子の行方は判らないが、同じクラスの相尾和久という子供がいじめの中心人物であることをつきとめた。

しかし相尾は、訪ねていった車坂の問いにまともに答えようとせず、あまつさえ正夫のことを「うざくさい」などと小馬鹿にした。カッとなった車坂は相尾に殴りかかり、全治一ヶ月の怪我を負わせて、駆けつけた警官に逮捕されたのだった。

「確か車坂は商社マンで、海外出張などで家を空けることも多く、なかなか子供と接する機会もなかったんでしたね」報道で得た情報を私は思い起こしていた。「普段構ってやれなかった後ろめたさと、正夫くんが見つからない焦りもあって、怒りに我を忘れたとか」「私にもそのように言っていた」先輩はうなずいた。「話しぶりから、自制心が強いという印象を受けた。それでも激高したのだから、

よほど腹に据えかねたのだろうか」

しかし、車坂の逮捕は最悪の結果を招いた。息子の正夫が自殺したのだ。失踪一週間後、相生山中腹で首吊り死体として発見された。傍らには電池の切れた携帯電話が落ちており、最後の発信は車坂宛だった。

「既に勾留され、電話も没収されていた車坂は、その電話に出られなかったんですね。さぞ落ち込んでいたでしょう」自分が軽はずみな行動に出ず、逮捕されずにいたら、息子の電話に出て、死を思い留まるよう説得できたかもしれない——そう悔やんだに違いない。

「確かに気落ちはしていたが」先輩は黒い点のような目を瞬いた。

「ただ、こうも言っていたな。『最後の電話が、母親でなく自分宛であつたことが嬉しい。普段離れていても、やはり心は通じていたと実感した』と。それだけに、余計に心は痛むのだろうか」私はうなずきかけたが、何かひっかかるものを感じた。

「母親はどうしてるんですか」

「事件の心労で倒れてしまい、夫の接見にも来られない状態だそうだ」

「それでも電話には出られたでしょう。正夫くんは母親には電話しなかったんですか」

「と、いうことらしいな。それが問題かね？」

「厭なことを思いついてしまったんです」私は説明した。母親でなく、普段あまり話もしない父親にだけ電話したのはなぜか。相手が絶対に出ないことを判っていたから、すなわち車坂の逮捕を知っていたからではないか。

「出ないと判って電話した？ どうして」

「相手が出ると、声で正夫くんではないとばれてしまうからです。つまり、その時正夫くんは既に死亡していて、電話をかけたのは別人だったのです」携帯電話なら、出なくても着信履歴が残る。何日の何時に正夫の携帯電話からかかってきたのか記録されるのだ。

「誰が、なぜそんな擬装をしたのか——その疑問にも、答えられるんだらうね」

「もちろん。擬装したのは車坂義男です。と言っても、自分で電話するわけにはいかなから共犯者に頼んだのでしょう。擬装の理由は——アリバイづくりです」

そもそどこか釈然としなかったのだ。いじめが原因で息子が家出したからといって、いじめた相手を難詰し、暴力に訴えたりするものだろうか。まずはあらゆる手を尽くして息子を捜すのが当然ではないか。直情径行型なら別だが、今までの情報を総合すると、車坂はむしろ冷静な男のように思える。

ひょっとして、相尾和久への暴行は、逮捕されることを予想した上での、意図的な行動だったのではないか。

もちろん、好き好んで捕まる人間などいるわけがない。しかし、それが、もっと大きな罪を逃れるためだとしたらどうだろう？ たとえば、息子殺し。

決して計画的犯行ではなく、何かの行き違いで息子を死に至らしめてしまい、それを警察にも世間にも、何より妻にも隠さなければならなくなったとしたら——息子の死体を山中に運び、縊死の擬装をし、共犯者と段取りを打ち合わせた上で、わざといじめの相手に暴行して警察に捕まる。

数日後、息子の遺体が見つかり、更に勾留中に正夫からの「最後

の電話」があったことが判明する。もし車坂が電話に出ていたら、息子の命は救えたかもしれない——マスコミの好きそうな物語だ。

車坂は一躍悲劇の主人公となる。相尾への暴行事件も、息子を思うあまり激情に駆られてと弁解すれば、軽い罪で済むだろう。

「証拠はないな」私の説明に対して、先輩は簡潔に評した。「論理的ではあるが」

「証拠ならこれから見つけます」勢い込んで接見室の椅子から立ち上がった時、先輩の目に浮かぶ笑いに気づき、私は我に返った。

「先輩」咳払いを一つして、椅子に坐り直す。「もしかして、かついだんですか」

今の推理は、先輩が聞いたという「車坂正夫は死の直前に父にだけ電話した」との話に基づいている。もし、これが嘘なら——。

「どちらでもいいじゃないか。すばらしい推理が聞けて、私は満足だ」

「やっぱり」私は溜め息をついた。悪趣味にもほどがある。

「ご自分の状況を考えてください」

「失礼した」先輩は肩をすぼめた。

「では真坂先輩。遅まきながら本題といきましょう。事件当日の行動について、そろそろ正直に仰っていただけませんか」

ラストコール

蒼井上鷹

©UETAKA AOI 2006

発行日 2006 年 12 月 5 日

発行者 長谷川晋一

発行所 (株)東京創元社

〒162-0814 東京都新宿区新小川町 1 - 5

tel 03-3268-8231

e-mail tss@tsogen.co.jp

url <http://www.tsogen.co.jp>

表紙 東京創元社装幀室